

第2章 遺構概説

本資料集に掲載する墨書土器が出土した主な遺構について概説する。ここで概説できない遺構や、調査成果の詳細は年次ごとに発刊している平城宮跡発掘調査部の発掘調査概報によらねたい。また、既刊の『集成』でも同一の遺構から墨書土器が出土している場合も多く、第167次以前の調査成果については、『集成I』、『集成II』を参照されたい。

SD2700 内裏東外郭官衙と内裏東方官衙の間を南流する基幹排水路。これまでの調査で出土した、土器、瓦、木器など遺物の量は、他の宮内基幹排水路と比較して群を抜いている。官衙が密集する第172次調査区はとくに墨書土器をはじめ遺物の出土が多く、木製品、土器、瓦など特筆すべき遺物が出土した。SD2700の検出面積に対して出土した土器の量は、内裏北外郭東側の第129次、第139次に比べ、内裏東側の第21次、第154次、第172次が圧倒的に多いが、墨書土器の点数は出土した土器の量におおむね比例する。第172次で検出したSD2700の堆積層は6層ある (Fig.2)。①～④層の土器に大きな時間差はないが、⑤、⑥層はやや新しい様相を示す。本資料集では出土層位がわかる資料については、層位ごとに釈文を掲げた。重要な資料の出土位置はFig.3に示した。

開削当初SD2700は素掘溝であり、この時期の埋土である①層から、養老7年(723)、神亀元年(724)の紀年木簡が出土している。天平年間前後に東岸を西に寄せることで溝幅を4～5mにせばめ、石積み護岸を構築したとみられる。この時期の堆積土である②層からは、天平～天平宝字年間(729～765)の紀年木簡が出土している。天平宝字年間頃(757～765)に瓦を多量に含む土(③層)で溝の西岸を護岸し、④層はその時期の堆積土とみられる。③、④層からは天平勝宝～天平宝字年間(749～765)の紀年木簡が出土した。奈良時代末頃に、西岸を東に大きく寄せて、細い溝に改修する。⑤層の堆積により、溝はほぼ埋まり、⑥層の堆積により、完全に埋没したとみられる。

第172次調査では、最下層の①層から墨書土器は出土していない。②、④層を中心に「宮内省」、「蘭司」などの官衙名を記した資料が出土している。なかでも「宮内」ないし「宮内省」は、内裏東方のSD2700に集中しており、第21次(『集成I』193・214・216・217、『集成II』5)、第139次(『集成II』726)、第172次と合わせて12点を数える。小子門近くで実施した第29次調査においてSD3410から出土した1点(『集成I』552)をのぞくと、13点中12点がSD2700より出土したことになる。

SD3410 東院地区から西流するSD11600が、造酒司地区の西南で南に向きを変えてSD3410となる。小子門西脇を通り、東面大垣の西側を南流する基幹排水路である。第274次で32点の墨書土器が出土した (Fig.6)。溝は数度の改修がおこなわれており、平城遷都当初の堆積土層は残存していない。溝の埋土は大きく上下二層にわかれ、下層は奈良時代後半の、上層は平安時代以降の遺物を含む。第274次の調査区南寄りでは桁行3間×梁行1間の橋状遺構(SX17640)を検出した。SX17640以北では溝幅約4mだが、南では溝幅3.4mにせばめて石積護岸が施されている。

SD3035 第241次、第250次、第259次で検出した造酒司地区の西側を南流する南北溝 (Fig.5)。第22次調査で検出した井戸SE3046の水を受け、造酒司地区の南を画する東西築地SA16702の北で東西溝SD16731に合流する。木簡は和銅4年(711)～郷制施行期(740～)に至る年代幅を持つ。

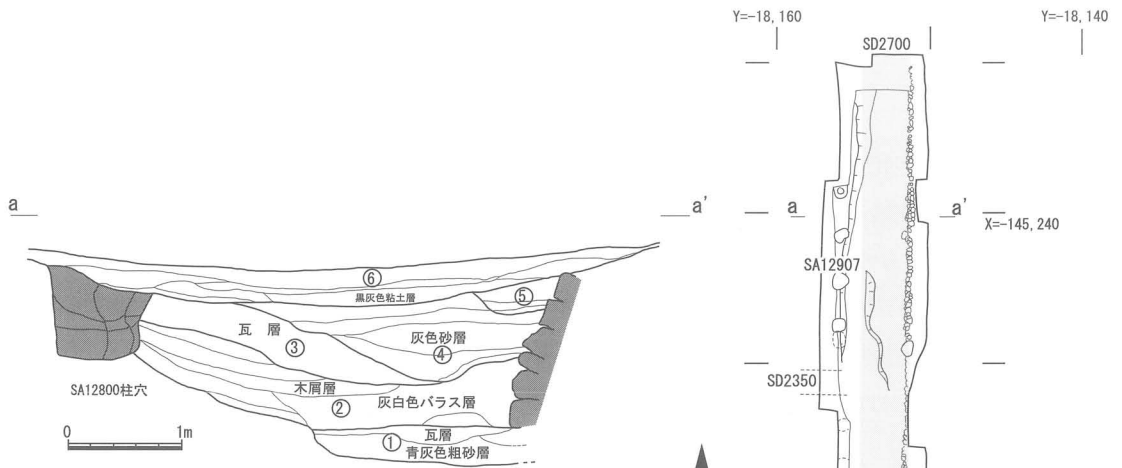


Fig. 2 平城第172次調査SD2700堆積層
(①～⑥は釈文の層位に対応)

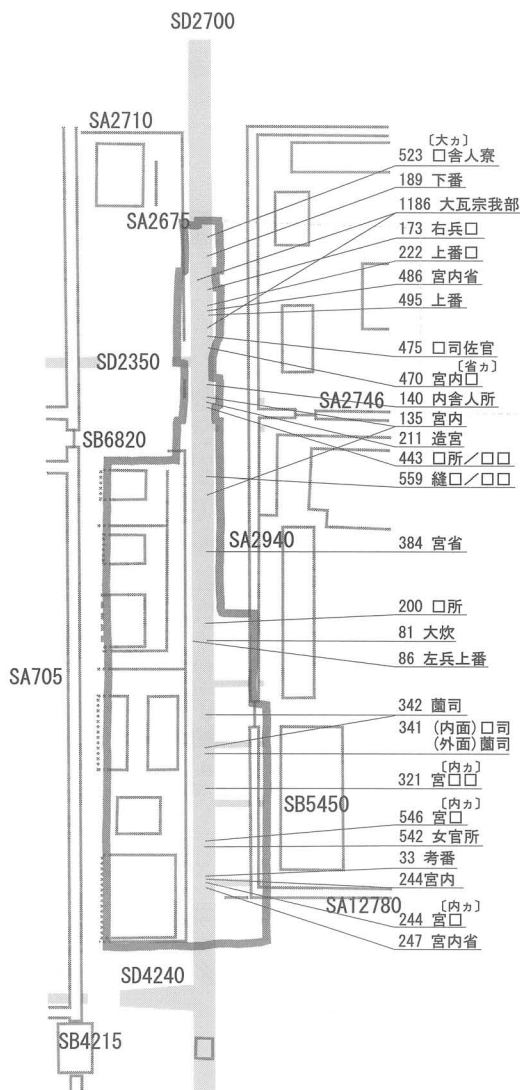


Fig. 3 SD2700主要な墨書土器の出土地点
(3m×3mグリッド単位でとりあげ)

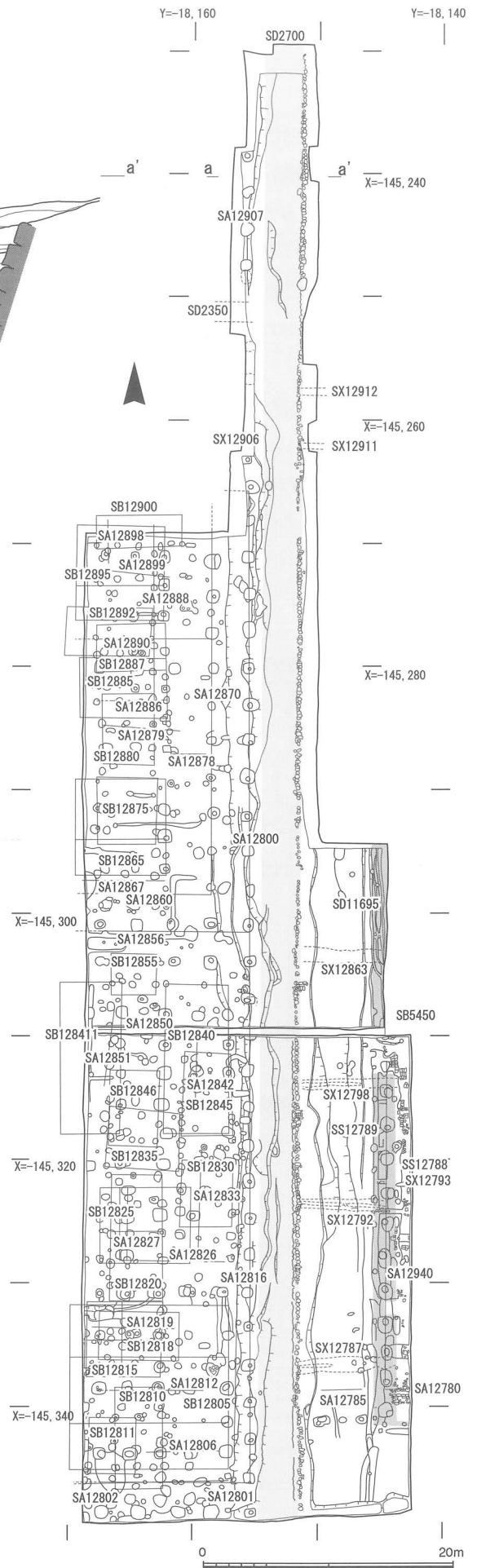


Fig. 4 平城第172次調査 遺構平面図 (1/500)

SD3715 中央区朝堂院と東区朝堂院の間を南流する基幹排水路。第157次調査では、「大炊」、「内木工所」関係の墨書土器が集中することが指摘されている（『集成II』）。本資料集の対象となる調査では、第一次大極殿院の北方の大膳職推定地南東隅（第170次）と中央区朝堂院の南東部（第171次）の各調査で検出している。SD3715は霊亀年間頃に開かれ、2度の改修を受けて平安時代初頭まで存続するとみられる。下層は奈良時代前半、中層は奈良時代末、上層は平安時代初頭の遺物をそれぞれ含む。平城宮北寄りの大膳職推定地付近（第170次）では、上層に中世の土器を含み、廃都後も長い期間、開口していた可能性が高い。

SD3825 佐紀池SG8190から流れ出て第一次大極殿院西辺を南流する基幹排水路。2000年、大極殿院西辺地区の調査（第315次、第316次調査）で検出され、14点の墨書土器が出土した。平城宮の造営とともに開削されたとみられ、2度の改修が確認されている。佐紀池SG8190の造営に際し、溝心をやや東に移動して掘り直す。この時期は紀年木簡や平城IIの土器が出土していることから、神亀年間（724～729）とみられる。天平17年（745）の平城遷都後、取水口をさらに東に付け替えて改修し、奈良時代末には埋没したとみられる。

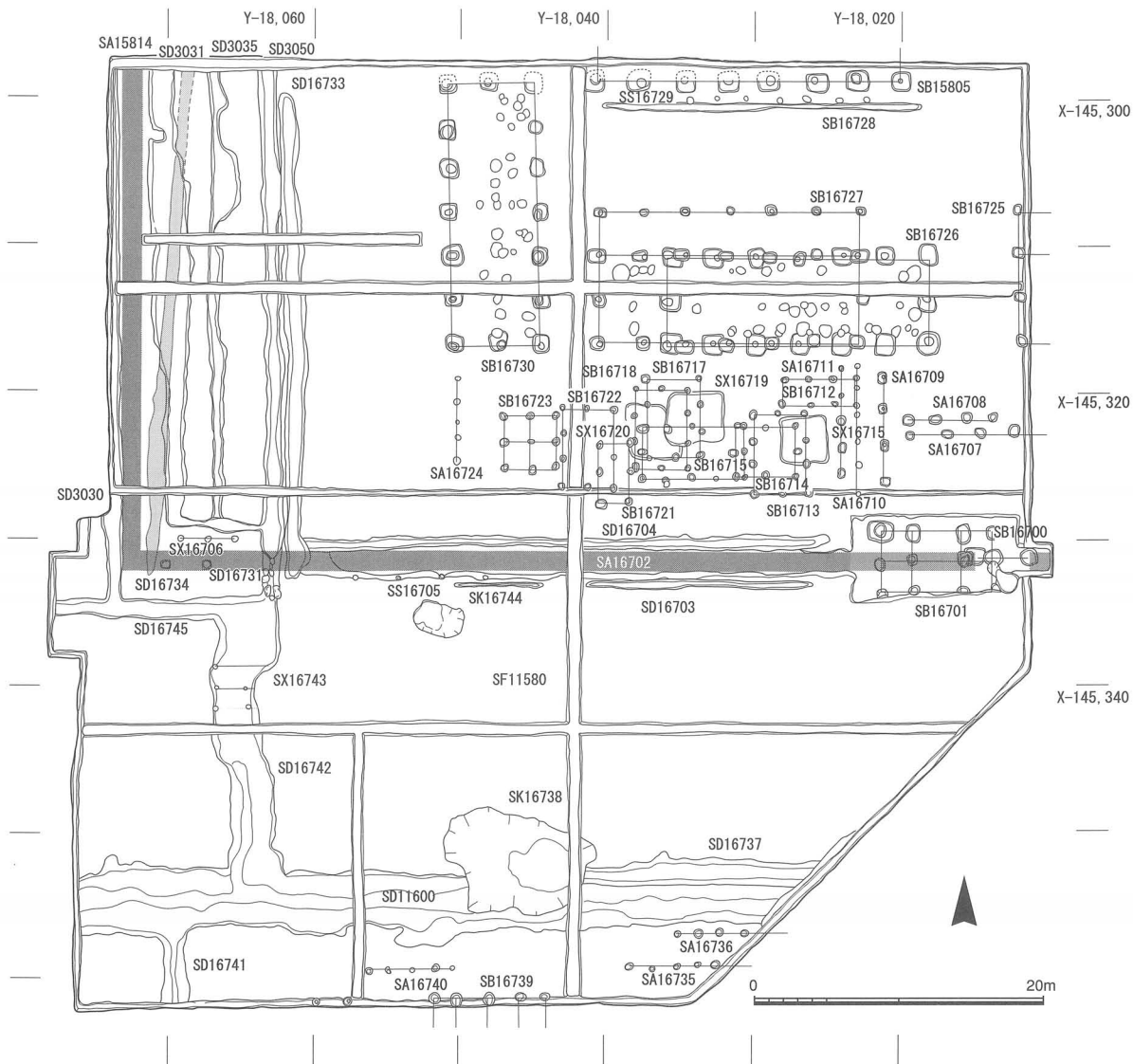


Fig. 5 平城第250次・第259次調査 遺構平面図 (1/500)

SD4951 東一坊大路西側溝
 と平城宮東面外濠を兼ねた南北大溝 (Fig.6)。溝幅約 6~7.6 m、深さ約 0.8~1.4 m をはかる。埋土は大きく上下 2 層にわかれ、下層は奈良時代の遺物を含み、上層は平安時代以降の堆積である。溝は幾度かにわたって改修を受けており、造営当初の堆積土層は残っていない。木簡などから下層堆積層の年代は天平年間中頃 (740 前後) 以降、天平宝字年間 (757~765) までと考えられる。第 274 次調査でみつかった墨書土器 102 点は、1 点 (892) を除いて、すべて下層から出土している。その内容は、硯の蓋を取ることを禁止したものや (929)、難波津の歌の習書 (895) など多様な内容を含む。

SD5200 東院地区南面大垣の南側を流れる二条条間路北側溝。第 280、284、301 次で検出

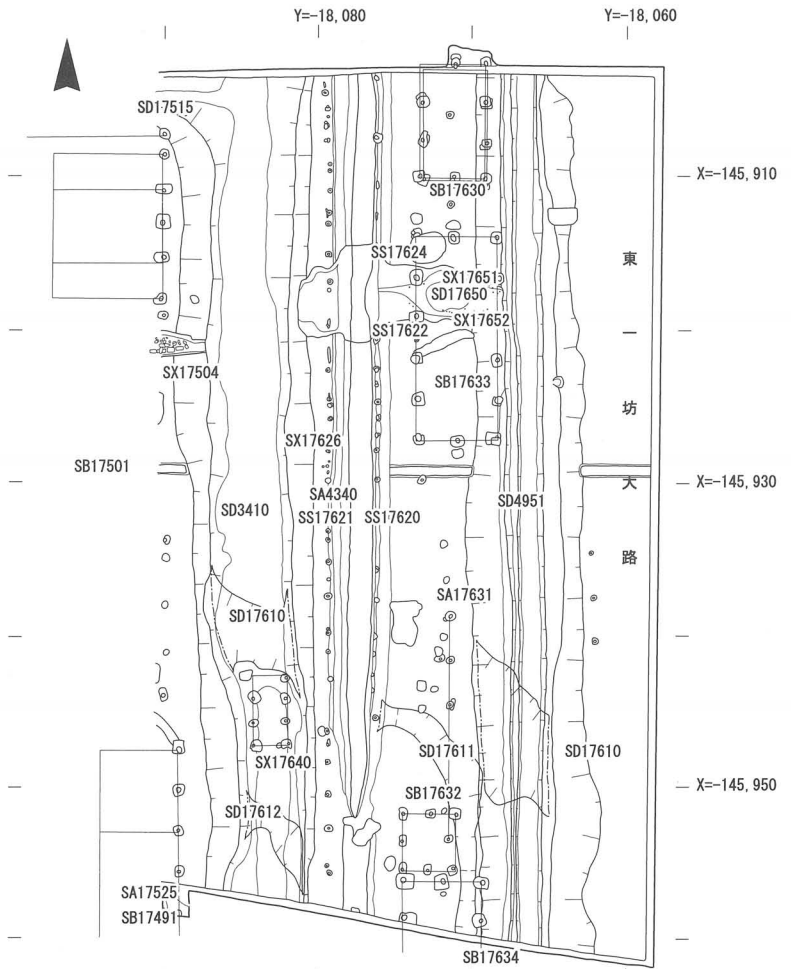


Fig. 6 平城第 274 次調査 遺構平面図 (1/500)

し、4 度にわたる改修が確認された。最下層の溝は幅 1.5 m の素掘溝であり、平城宮造営時に開削されたとみられる。奈良時代前半、東院南面の区画施設を掘立柱塀 SA5010 から築地大垣 SA5505 につくりかえる際、南に約 1.2 m ずらす。平城遷都 (745) 後には、さらに 2 m ほど南へ掘り直し、玉石で護岸を施し、門の前に木樋を通す。奈良時代末には、そのままの位置で溝幅を広げた浅い溝に改修し、玉石で護岸を施す。上層埋土には灰釉陶器や緑釉陶器片を含み、平安時代まで存続していたとみられる。

SD9171 中央区朝堂院の南東を区切る掘立柱塀 SA9201 の北雨落溝。基幹排水路 SD3715 に注ぐ。中央区朝堂院の南東部、東朝集殿の存否を確かめることを目的とした第 171 次調査で検出した。平城 II~III の土器を含む。刑部省関係の墨書土器 (14、15) は第 136 次調査区内に拡張した地点から出土した。

SD11600 東院北方、造酒司地区の間の東西道路 SF11580 の南側溝。第 259 次調査で検出した (Fig.5)。残存規模で溝幅約 5 m、深さ約 1 m もある大溝である。東院地区が東に張り出す部分で南に折れ、SD3410 となるのが第 154 次調査で確認されている。埋土は大きく 2 時期に分かれ、下層からは延暦年間 (782~806) の紀年木簡を伴う平城 V の土器が多量に出土し、上層は平城 VII に属する平安時代の土器を含む。

SD11620 式部省と式部省東官衙の間を通る南北道路 SF11960 の東側溝。第 222 次と第 236 次で検出した。第 222 次調査区からは、「式」(630) や「曹」(631) などの墨書土器が出土した。

SD12965 第一次大極殿院の西側、佐紀池の南側を東へ流れる東西溝。第177次、第316次で検出している。基幹排水路SD3825が佐紀池SG8190から流れ出た地点で合流する。平城宮造営時には存在せず、佐紀池SG8190の南堤の造成に伴って開削されたとみられる。溝は2時期にわかれ、第316次の調査成果では下層埋土から神亀3年(724)の紀年木簡とともに平城IIの土器が出土した。

SE13330 第222次調査で基壇建物SB14740の下層より検出された井戸。式部省関連の木簡や、天平元年～3年(729～731)の紀年木簡など約4800点が出土した。「式部省五□」(633)は抜き取りから出土した。

SD13402 第一次大極殿院西面築地回廊の西側を流れる南北溝。大極殿院の中軸で東側に折り返した位置で、奈良時代初頭に短期間使用されていた南北溝SD3765が検出されており、和銅創建時に計画的に開削されたと考えられている。出土遺物から奈良時代末まで開口していたとみられる。

SE14690 第188次調査の東区朝堂院朝庭域で検出された平安時代はじめの井戸。同時期の小規模建物群が存在し、平城宮廃都後まもなく、この付近に集落が営まれたことが指摘されている。

SE15800 第241次調査において造酒司で検出した板組の井戸。周囲に敷石の方形溝SD15821がめぐり、奈良時代後半には平面六角形の覆屋SD15821を伴う。特殊な構造をもつことから、酒造用の実用的な井戸というより、特別な役割を担う井戸であると推定されている。平城IV～Vの土器が出土した。

SD15817 造酒司地区SD3035の上流。第241次調査ではSD15817と報告されているが、南側の第250次、第259次調査では識別されていない。SD3035と同一の溝とみてよいだろう。

SD16040 東院地区の南寄りにある井戸SE16030の水を南に排水する溝。東院南面大垣の南門の下をくぐって南に続く。第301次調査で検出した。門より北側では大きな平石を敷いた石敷の溝で、南側は数度の改修が確認されている。平城宮造営時の開削当初は素掘りであるが、奈良時代前半、南面を画する掘立柱塀SA5010の造成に際して0.5mほど東に寄せて掘り直す。平城遷都(745年)後の改修で、側板の護岸を施し、その後、ほどなく木樋に改修した。奈良時代末、門を礎石建に建て替えた際に埋められた。溝上層、木樋の埋土から墨書土器3点が出土している。

SD16742 造酒司地区南面築地塀SA16702の南で、宮内道路SF11580を南北に横切る溝(Fig.5)。北からSD3035、西からSD16745の水を集めて、東西道路SF11580の南側溝SD11600に注ぐ役割を果たしていたとみられる。第259次調査で8点の墨書土器が出土した。

SE17445 第270次調査で検出した東院地区西部にある井戸。井戸の掘形は抜取穴によってほぼ壊されている。井戸埋土から平城IVの土器が出土しているが、出土した瓦の年代幅は広い。

SD17584 第280次(南区)、第301次調査で検出した東院南面大垣SA5505南側の雨落溝。幅0.5m、深さ0.25m。薄い板を杭でとめるシガラミが残っていた。

SD17650 式部省東方東面大垣SA4340の築地を切り込む開渠。第274次調査で検出した(Fig.6)。宮内基幹排水路SD3410の流下水の一部を、東一坊大路西側溝SD4951に流す役割を担う。東院地区より南の東面大垣は、西側に基幹排水路SD3410、東側に東一坊大路西側溝SD4951が南流する。SD3410は南面大垣を抜けて二条大路北側溝SD1250に合流した後、SD4951に注ぐが、並行して南流する途中で東西溝SD17650によってつながることが明らかになった。溝埋土と東面大垣積み土との層位関係から、SD17650は平城宮造営当初に開削され、大垣造営の際、幾度か改修され、天平10年前後の大垣の改修に伴って埋め立てられたとみられる。埋土からは平城III古段階の土器が出土しており、墨書土器が4点含まれる。

SX18160 第一次大極殿院西面築地回廊の東雨落溝SD14290の水を、西に排水する暗渠。凝灰岩の切石で築地回廊SC13400の下を通る。第305次調査で検出、「近衛府一」(993)と記した墨書土器が出土した。